

技師会のセミナーにおいて、学術的な事項を取り扱う機会が少ない中、56名と多くの参加があり関心の高さが窺われた。一方で、参加者の内訳を見ると、経験10年以上、かつ演題発表の経験がある方の割合が6割以上であり、今後は初学者の掘り起こしが課題と考える。

抄録作成のレクチャーでは、構成する項目について基本的な考えを解説した。目的は取り組みのきっかけとその意義を述べるものであり、結論は目的と強い結びつきを持つものである。また、その過程にある方法は、取り組みの手法を丁寧に述べるものであり、結果はその答えである。こうした基本的な考えを念頭に置く事は、学術活動の進め方にも活かされると考える。来年度以降の秋田県診療放射線技師会学術大会などで活かされる事を期待したい。

モダリティごとの応用レクチャーでは、日常業務の課題をデータ収集から学術的に考察する流れを解説した。通常の検査プロトコールにおける画質向上や被ばく低減と言ったタスクでは、ファントム撮影によって得られたデータの分析で傾向を探ることが一般的である。また、過去の臨床データを後向きに解析することも同様である。こうした数多くのデータを用いることは客観的な結果を得ることに繋がり、主観に頼らずにより良い傾向を見つける事に役立つ。今回は各モダリティ4名の演者に、それぞれの経験などをもとにわかり易く解説を頂いた。難しいテーマであったがよく纏められており、事後アンケートにおいて参加者の満足度も高かった。演者の方々にはお礼を申し上げたい。

学術演題は降って湧くものではなく、日々の業務における視点の置き方と取り組みによるものと考え。特に未経験者には、レクチャーの内容を参考に自発的な取り組みを始められて、成果を発表される事に期待したい。

文責 大村知己